



た学生がたくさんいたのだろう、と。私は、記念館の方に教えていただいて、学生たちの遺書をまとめた本“きけ わだつみのこえ”を読みました。 “母ちゃんが私を必死でそだててくれたことを思うと、何も喜ばせることが出来ず、死んでゆくのがつらいです。”

これは、特攻隊員であった、林市造さんの遺書の一部です。母親への感謝や謝罪の気持ちに、強く心を打たれました。他の遺書にも親孝行ができなかった事への無念を書いた方がたくさんおられました。

日本の戦争が終わって、今年で七十八年。当時の学生たちは、生きていれば、私の曾祖父と同じくらい年代でした。戦争があったのは、遠い昔の話。でも、“生きたい”という強い思いを綴った遺書や私と同じくらいの年の学生の写真を見て、とても人事には思えませんでした。

現在、戦争を経験した方から、直接話を聞

ける機会が、非常に少なくなっています。しかし、当時の人々の辛い状況を知り、その心情に触れることで、ようやく“何故、戦争をしてはいけないのか”分かるのだと思います。亡くなった彼らは、何を思っただて死んでいった。直筆の遺書を実際に見ると、当時の様子や込められた思いが見えてくるようです。はっとしました。死にたくなかった、家族に会いたかった、平和に暮らしたかった。・。そんな彼らの思いを、無駄にしてはいけない。もう二度と、戦争を起こしてはいけない。世界では、ウクライナを始め、今も絶えず紛争が起こっています。今も、彼らと同じ思いをしている人が、大勢いるという事です。これ以上、戦争によって辛い思いをする人を、増やしてはいけません。そのためにも、私たちは、戦争についてもっと知らなければならぬと思います。